

授業評価の心理学的研究

藤田 哲也

法政大学 文学部

はじめに 現在、非常に多くの大学で授業評価アンケートを実施しているが、その活用方法は、当然のことながら、それぞれの大学の抱える事情や授業の実態、導入の経緯によって様々である。本研究ではそれら様々な実施方法について集約や比較を行うのではなく、「授業評価の心理学的研究」のために以下の3つの観点を取り上げ、今後の新たな議論の端緒としたい。

1. 授業評価における評価行動の特性という観点

多くの大学での授業評価アンケートの実施方法は、授業期間の終了間際に1-2週間の期間を設け、全学的に一斉に調査を行うというものであろう。この実施方法によって得られたデータは、一回一回の授業に対する評価を蓄積したものと見なしてもよいのだろうか。

藤田(2000)はこの問題について次のように検討した。半期科目の「教育心理学」の講義において、毎回の授業終了時に授業評価を行った。また、最終回の授業内では、「半期全体」についての授業評価を求めた。授業評価の項目は、「学生自身の自己評価」のための項目と「教員の授業の仕方」に対する項目に大別できた。そして(a)毎回の授業評価の平均と、(b)最終回に評定を求めた「半期全体」との比較を行った。

その結果、「教員の授業の仕方」に関する項目においては、「半期全体」の評定値が、「毎回の平均」より有意に上回った。つまり、毎回の授業に対する評価を積み重ねたものに比べ、最終回で一回だけ評価を求めたものは過大評価されていると言える。一方「学生の自己評価」に関する項目ではこのような傾向が見られず。この「過大評価」は単なるバイアスではなく、授業の仕方に対してのみ選択的に起こることが確認された。

これらの結果から言えることは、授業評価の評定値、特にその絶対値に基づいて授業改善の必要性を検討しようとしているのなら、評価手続きについても考慮しなくてはならないということである。例えば5段階評定であれば、3が意味的な中央値になるので、それを上回っているかどうかに基づいて授業改善を促すかなどを決定するという運用の仕方を考えるのであれば、最終回付近で一回のみ評価を求めると、改善の必要性のある授業を見過ごしてしまう危険性があるということである。バイアスの問題以外にも、授業評価の結果をつぶさに授業改善につなげるためには、毎回の実施が望ましいし、学生の理解度についての形成的評価の役割も果たすことができ、有用だと言えるだろう。

授業評価は言うまでもなく、学生一人一人の評定行動から成り立っている。決して数値(評定値)が先にあるわけではない。その意味では、評価の手続きによって得られる結果が変わりうるという事実をふまえ、適切な授業評価を行うことが肝要であろう。

2. 授業評価を授業改善の指標として活用するという観点

授業評価を行い、結果を集計し、それを授業者にフィードバックしても、実際にその授業評価が活用されなくては意味がない。いわゆる「取りっぱなし」に近い状態で、形式的にのみ授業評価を運営している大学も少なくないであろう。

授業評価の評定値は、直接的ではないにせよ、授業の教育効果を反映したものと見なす

ことができる。授業評価は学生の主観的なものであるのは確かだが、学生の主観的な評価を軽視してよいというわけでもないだろう。そのような見地に立ち、藤田(2001)は、自分自身の「心理学概論」に類する講義科目において、大学側実施の授業評価アンケートを、授業改善が達成できていたかどうかを確認するための指標として活用した。具体的には、1999年度に実施された際の授業評価において、評定値の芳しくなかった「学習目標の明示」及び「学生の質問・意見への配慮」の2つの項目に着目し、教育心理学的な知見に基づいた具体的な改善策を講じ、2000年度の授業において実施した。そして、2000年度の授業評価によって、当該の2項目の評定値が有意に上昇していることを確認した。

授業評価アンケートが無くても常に授業改善をしようという姿勢を持ち続けることが重要であることは言うまでもないが、それが自己満足や思いこみに終始していたのでは意味がない。授業改善に対する検証作業は必要であるし、授業評価アンケートはまさにそのために活用が可能であり、有効な指標となりうるということである。単年度で完結する運用ではなく、経年変化についても検証可能な運用システムを構築することが必要であろう。

3. 授業評価の評定値と学生の心理的特性との関連という観点

授業を受けている学生は一様ではなく、様々な次元での個人差を持っている。授業参加以前に学生が持っている心理的な特性が、授業評価にどのような影響を及ぼしうるのかという観点を持つことは、翻って、学生理解という視点を供給する。それは、授業者と学習者の相互作用の基礎の一つになると言えるだろう。

田中・藤田(印刷中)は、学習活動に大きく関わっている個人差として動機づけを取り上げて、授業評価との関連について検討した。学習者が持つ達成目標を「マスタリー目標(学習や理解を通じて能力を高めることを目指す)」、「パフォーマンス接近(自分の有能さを誇示し他人から良い評価を得ようとする)」、「パフォーマンス回避(自分の無能さが明らかになる事態を避け他人からの悪い評価を回避しようとする)」の3つの次元から捉え、授業評価のうちの「学生の自己評価」と「教員の授業に対する評価」、及び、学業成績との関連を見た。その結果、授業以前に持っていた達成目標の個人差によって、授業評価の仕方や学業成績が異なることが確認された。得られた授業評価の評定値が、純粋に授業そのもののみを反映しているのではなく、学生の心理的特性をも反映しているという視点に立って、評価結果を吟味することも重要であろう。

4. まとめ

以上、授業評価についての心理学的研究、という立場から3つの観点について取り上げた。「授業評価」の評価行動に含まれる特性を見極めることの重要性と、その活用可能性、そして得られた評定値の背後にある学生の心理的特性を考慮することの意義についてである。もちろんこれ以外にも心理学的な見地から授業評価について検討を行うことは可能であろう。本研究で主張した観点以外のもも含め、「授業評価」を最大限に活用するためにも、心理学的なアプローチを取り入れた検討が有効であると考えている。

引用文献

藤田哲也 2000 学生の受講態度の自己評価と授業評価との関係について 光華女子大学研究紀要, 38, 249-268.

藤田哲也 2001 大学の心理学講義における授業改善の試み — 学生による授業評価を用いた検証 — 京都光華女子大学研究紀要, 39, 143-168.

田中あゆみ・藤田哲也 印刷中 大学生の達成目標と授業評価、学業遂行の関連 日本教育工学雑誌